無くしたペンダント

peach-pit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無くしたペンダント

【Ｎコード】
Ｎ９８０２Ｄ

【作者名】
ｐｅａｃｈ－ｐｉｔ

【あらすじ】
高校生の花本桜。気の合う友達だった中村秀斗に告白され、付き合うことに。しかしある日ささいなことで喧嘩。でも秀斗が桜にペンダントを渡し、仲直り。秀斗のことが好きな花実梨砂によってまたまた喧嘩。しかしその喧嘩によって桜は交通事故に。その交通事故によって桜は記憶喪失に・・・。

『今日から新学期です。みんなー・・・』

そう。

今日から新学期。

高3の2学期になる。

「花本(はなもと)」

隣からボソッと名前を呼ばれた。

振り向いてみると、男友達の『中村秀斗(なかむらしゅうと)』がいた。

「何？」

私も小さな声で話す。

「話長くね？」

「だよねー」

私たちは他愛の無い話をする。

私たちは高2からクラスが一緒ということで仲良くなった。

結構気が合う友達。　　・・・だと思っていた。

一週間前、中村(なかむら)に告白されたのだ。

私も結構気になっていたので返事はＯＫを出して、付き合うことになったのだ。

「なぁ、今日サボろ？」

ニッコリと満面な笑顔をする中村(なかむら)。

「また？！しかも今日新学期の初めだよ？！！？」

「いーじゃん♪」

「やだ」

私はニッコリと笑う中村(なかむら)にたいし、怒りに耐え切れず即答し、前を向く。

だってね？

中村(なかむら)は平気かもしれないけど、私アンタのかわりに毎日怒られてんだからね！

もう・・・こりごりよ・・・。

・・・でも、好きなんだよね。　そんな中村が・・・。

始業式は終わり、みんなそれぞれの教室に戻っていく。

「花本、ちょっと」

教室に戻ろうとする私の動きを中村の言葉が止める。

見ると、中村は真剣な瞳で私を見つめていた。

「うん」

私は中村に着いていく。

私と中村の足は体育館の裏側で止った。

黙りつづける中村。

・・・どうしたんだろ？

数秒後、ようやく中村の口が開いた。

「なんでさっき怒ってたの？」

「・・・サボるとか言うからよ」

「そんなことか・・・」

はぁ・・・っとため息をつく中村(なかむら)。

・・・は？　そんなこと??　ふざけんなよッ！！

「アンタ分かってんの?！私はアンタのかわりに怒られてんのよ！?もー毎日よ！なのにアンタは平気な顔するし・・・。ふざけないでよッ！少しは・・・少しは私の事も考えてよッ！！！！」

私は目に涙を溜めていた。

中村(なかむら)は下を向いている。

・・・反省してくれたカナ？

「俺の事・・・嫌いになったのか？」

「へ？」

い・・・意味分かんない。

中村(なかむら)の表情は寂しそうだった。

私は思わず黙り込んでしまう。

・・・嫌いになるわけないじゃない。

何考えてんのよ・・・。

「やっぱり・・・嫌いになっちゃったよな・・・」

「え?!」

「悪かったな・・・今まで」

そう言って中村(なかむら)は私とは反対方向に歩き出す。

「え?!ちょっと待ってよッ!!」

私は呼び止めるため、叫んだが中村(なかむら)は止ってくれない。

私は歩きつづける中村(なかむら)に何度も何度も叫んだ。

・・・でも、見えなくなってもこっちを見てはくれなかった。

私はその場に座り込んだ。

それと同時に溜まっていた涙がこぼれる。

なんで・・・？

私は嫌ってなんかないのに・・・。

ただの被害妄想だよ・・・。

バカじゃないの？！

ほんと・・・バカだよ・・・。

涙は地面が濡れるくらいこぼれていた。

いやだよ・・・やだよ。

私を見捨てないでよ・・・。

私は膝を抱えて泣き崩れた。

「花本（はなもと）・・・さん？？」

可愛らしい声が私の耳に届いた。

私は手で涙を拭い、顔を上げる。

私を呼んだのは、クラスメートの『矢本晶(やもとあきら)』さんがいた。
矢本(やもと)さんとはただのクラスメートで、話したことがあんまり無かった。

「何してんの？」

「え・・・。ちょっとね・・・」

私の顔は苦笑いをしている。

フラれた後で本気で笑える訳無い。

「・・・秀斗(しゅうと)にフラれた？」

「え？！」

・・・な？！

なんで付き合ってたこと知ってんの？！

それに今・・・　″秀斗(しゅうと)″って・・・。

どうゆう関係？？

「さっき、ココに来る前、秀斗(しゅうと)に会ってさ、声かけたんだけど泣いてたみたいで返事無かったんだ。・・・別れちゃったの？」

「あのぉ？中村とはどーゆう？？」

「あー。幼馴染だよ」

アハッ・・・。

なんだ・・・ただの幼馴染か・・・。

ちょっぴり安心する私。

「で。別れちゃったの？」

あっさりと言う矢本(やもと)さん。

「うん・・・。ちょっと喧嘩しちゃった」

私はペロッと舌を出す。

「そっか・・・」

矢本(やもと)さんは空を見上げた。

「うちもさ、好きな人いたんだ・・・」

え？好きな・・・人？？

私はポカーンと口を開ける。
そんな姿を見た矢本(やもと)さんはフッと笑う。

「ありえないよね。・・・あはは。そいつさ、うちのいとこなんだ。んで、去年交通事故でね・・・。それでもまだ、好きなんだ」
空を見ている矢本(やもと)さんの瞳には涙で光っている。

・・・そんなに好きだったんだ。

「花本(はなもと)さんはさ！まだチャンスあんだからさ！！成功させなよ」
矢本(やもと)さんはこっちを見て二ッと笑う。

イメージが違う・・・。

矢本(やもと)さんは金髪で、ピアスしてるし・・・、化粧しててすごくギャルっぽいのに・・・。

今は・・・。
乙女だ。

恋する乙女になってる・・・。

矢本(やもと)さんって意外に可愛いんだなぁ。

「ねぇ！ダチになんない？」

「え？」

ダチ・・・？

友達ってこと？

私と矢本(やもと)さんが・・・？

「ダメ？」

矢本(やもと)さんは私の顔を覗き込む。

「ううん。いいよ！」

私はニッコリと満面の笑みをする。

「うちのこと晶(あきら)って呼んで！えっと・・・」

「私は桜(さくら)！よろしくッ晶(あきら)ちゃん」

「あ・・・。晶(あきら)でいいよ。〝ちゃん〟ってのやだし」

「え〜?!」

私達は笑い合った。

私はこんな友達がほしかったのかもしれない。

「桜(さくら)。諦めんの?」

「何を?」

「は〜?!秀斗(しゅうと)だよッ!!」

「あ〜!そうだね」

忘れてた・・・。

「諦めちゃうわけ〜??」

「う〜ん・・・。あっちは私が嫌ってるって思い込んでるしなぁ〜・・・」

「『嫌ってない』って言ったの?」

「止めようとはした・・・」

うじうじする私に対し晶(あきら)はイライラしているようだった。

「・・・秀斗(しゅうと)をもらう。いい？」

「へ？」

もら・・・う？

それって中村(なかむら)を彼氏にするってこと？

「本気・・・なの？」

「あたりめーじゃん」

さっきとは違う・・・。

いとこのこと好きなんじゃないの？

中村(なかむら)に乗り換えちゃうほど軽い恋だったの？

そんなの・・・おかしいよ。

私の視線は地面を見ている。

「・・・嘘だよ？」

「え？」

「嘘に決まってんじゃん♪」

ニッコリと笑う晶。

「う・・・そ？」

「そ！桜がうじうじしてっからちょっとイラついちゃったんだ。ごめんね？」

そうなんだ・・。

嘘だったんだ・・・。

よかった。

中村が好きじゃないってことで一安心もしてるけど、晶が軽い恋をしていないということで一安心だよ。

「でさ、秀斗のことどーすんの？」

「・・・」

私は黙り込む。

中村(なかむら)と別れるか別れないか・・・。

よしッ

決めたッ！！！！！

「晶(あきら)。私・・・中村(なかむら)のこと・・・」

★　★　★

♪～ピーンポーン

うちはあるひとの家のチャイムを鳴らす。

そのチャイムで出てきたのは・・・

秀斗(しゅうと)だ。

「あれ？晶(あきら)じゃん。どした？」

「桜。アンタのこと諦めるってさ」

そう・・・。

さっき桜は　『諦める』　と宣言したのだ。

「ははは・・・。やっぱな。あーあ！また新しい恋見つけなきゃいけねーな！！」

・・・秀斗。

うちには分るよ？

今強がっちゃってるんだよね？

正直になれよ・・・。

バーカ・・・。

「秀斗。まだ桜のこと好きか？」

「え。あー・・・。まーな」

「じゃぁ・・・。これやりな」

うちは秀斗(しゅう)の耳に小さな声であることを教えたー・・・。

★　★　★

私は家に帰りるなり、部屋に直行した。

「はぁ～・・・」

深いため息をし、ベッドに横になる。

・・・晶(あきら)に諦めるって言ってよかったのかなぁ。

でも！もう決めた事だし！！

しょーがないよね・・・。

☆コンコンッ

窓から誰かがノックする音が聞こえた。

フッと窓を見てみると、そこには中村(なかむら)がいた。

窓を恐る恐る開けてみる。

「なんでココに・・・？」

「別に・・・」

さっき諦めると言った私にとっては本人の前ではちょっと話しにくい。

「これ・・・やる」

そう言って、握った手を私に差し出す。

私が手の平を広げるとその中にハートのペンダントを入れた。

・・・結構可愛い♪

「なんで・・・？」

「開けてみろ」

・・・答えになってないし。

私はペンダントをいじり回す。

すると、カチッと音を出してハートが開いた。

その中には2枚写真が入れられるようになっており、片方に中村(なかむら)の写真が入っていた。

中村(なかむら)は強引に部屋に入って来た。

入るなり、真剣な顔で私を見つめながら私の手を握った。

「好きですッ！もう自分勝手なことといわねーし、サボらねぇ。花本(はなもと)・・・いや、桜(さくら)のこと大事にする。だからもう一度付き合って下さいッ！！！！」

私は2度目の告白をされた。

この告白を聞いた瞬間、胸がキュンっとなった。

私は思わず顔を赤らめてしまう。

「はい。私も好きです」

私は告白をＯＫした。

だって・・・まだ好きなんだもん！

私は中村に腕を引っ張られ、ギュッと抱きしめられた。

「なぁ、これから桜って呼んでいいか？」

「うん・・・」

「じゃぁ俺のことも秀斗って呼べよ」

「うん・・・」

私は秀斗の心臓の音が高鳴っているのが分かり、すごくドキドキしてしまう。

「桜ドキドキしてるだろ？」

「秀斗も・・・でしょ？」

私が秀斗を見上げると、秀斗の顔は真っ赤になっていた。

思わずクスッと笑ってしまう。

秀斗(しゅうと)が体を離した。

「じゃぁ帰るわ」

「うん」

秀斗(しゅうと)は窓から出て行った。

次の日、この日も学校。

私は学校に着くなり、晶(あきら)のもとへ向かった。

「晶(あきら)！」

晶(あきら)は私の声を聞き、眠たそうな顔して振り向く。

「はよぉ～・・・」

「おはよ」

大きなあくび　（笑）

あいかわらず可愛いな。晶(あきら)わ。

「私、秀斗(しゅうと)ともう一度付き合うことにした！」

「え！マジ？！」

「うん♪」

私は嬉しくてついニッコリ。

「よかったじゃん。あれ？そのペンダントは？？」

晶(あきら)は私が首にかけていたペンダントに気づいた。

「これ？秀斗(しゅうと)にもらったの♪」

私はパカッとハートを開き、中を見せる。

「見て！左が秀斗(しゅうと)で、右が私なの♪」

「よかったじゃん♪あ。早く彼氏のところ行きなよ」

「うん。じゃね」

私は晶(あきら)に手を振り、教室に向かった。

ガラッ

ドアを開ける。

「おー桜(さくら)」

秀斗(しゅうと)が私のもとへ駆け寄って来た。

「おはよ♪」

「オス」

普通のあいさつだけど、私にとっては恋人同士という特別な挨拶だと思った。

「中村君♪」

ヒョイッと秀斗の肩に抱きついて来た女の子。

それは、『花実梨砂』というクラスメートだった。

梨砂ちゃんとは中学からの友達。

クラスNO．1の美少女で好評だ。

「花実、なんだ？」

「もー。梨砂って呼んでよぉ。秀・斗・く・ん♪」

甘い声を出す梨砂ちゃん。

ムカつく　（怒）

「うざ。俺のことときやすく呼ぶな」

「あ～ん。そんなこと言わないでぇ。じゃぁどうして桜ちゃんだけ名前で呼ぶのぉ？？」

「特別だからだ。あーもう！近づくなッ！！」

梨砂ちゃんの手を振り払う秀斗。

梨砂ちゃんはシュンッとしながら友達のところに行った。

「行こうぜ？」

「あ・・・うん」

私は秀斗に腕を引っ張られ、ついて行く。

「花本ウザいし！」

梨砂ちゃんとその仲間が私の噂で教室に声を響かせる。

私は思わず足を止める。

「桜？」

それと同時に秀斗も足を止める。

「花本死ね！」

秀斗の耳にこの言葉が入った。

「あ〝？！なんだとゴラァ？！」

秀斗はすごい顔で教室に入り、梨砂ちゃん達の所へ向かう。

「お前調子乗んなよ？」

秀斗は梨砂ちゃんの胸ぐらを掴む。

「だ・・・だって。中村君・・・。さ・・・桜ちゃんのことばっかりなんだもん・・・」

秀斗に胸ぐらを掴まれ、ビビる梨砂ちゃん。

「また桜にこんなこと言ったらしょうちしねーからな！」

秀斗は梨砂ちゃんの机を蹴った。

「行くぞ」

「う・・・うん」

私はその瞬間、梨砂(りさ)ちゃんがこっちを見てニラんでいるのが見えた。

「あー。あいつムカつく!!」

私たちはあの事件の後、屋上へと行き、二人で並んで寝転がっている。

「もー秀斗(しゅうと)怒りすぎ」

「だってよー」

「でも・・・秀斗(しゅうと)カッコよかったよ?」

「マジ?!」

秀斗(しゅうと)の顔がパァッと明るくなる。

「ありがと」

私はニコッと笑った。

・・・また秀斗(しゅうと)とこんなに笑い合えるなんて。

夢みたぃ♪

「うわっ！！」

秀斗(しゅうと)が叫び飛び起きる。

私は声が出ず、口をポカーンと開けたまま。

「次音楽じゃん！」

「え？！やばっ」

私も飛び起きる。

だって・・・音楽の先生が担任に報告するんだもん。

内申下がっちゃうよ。

私たちは急いで音楽室へ向かった。

もちろん教科書等は持っていない。

「はい♪」

秀斗(しゅうと)の目の前に見えるのは秀斗(しゅうと)の教科書。

差し出したのは梨砂(りさ)ちゃん。

「桜(さくら)の分は？」

「ないに決まってるじゃない♪」

ニッコリと笑う梨砂(りさ)ちゃん。

・・・やっぱね。

いやがらせかよ・・・。

最低だね。

品が落ちたね。梨砂(りさ)ちゃん。

可哀そうに・・・。

「桜(さくら)！」

「晶？」

晶が私の名前を呼ぶ。

「はいよ」

「え？」

晶が差し出したのは私の教科書だった。

「桜机の上に置いてたから」

「ありがとー！！」

私は思わず晶に抱きつく。

晶はおどおどしているようだったが関係無い。

晶に感謝感激☆

音楽の授業は無事終了。

「桜〜〜」

「晶？」

晶はふらふらと歩き、私にもたれる。

よく見ると、晶の顔は真っ青だ。

「ど・・・どうしたの？！顔真っ青だよ！！」

「ぎもぢわるい・・・」

「えぇ？！」

どーしよ・・・。

そうだ。保健室！！

保健室に連れて行こう。

「桜。教室戻ろうぜ」

秀斗はルンルンとスキップをしながら近づいてくる。

「ごめん秀斗！晶気持ち悪いみたいだから保健室連れて行ってくる

！！」

「おー」

私は晶(あきら)を抱えて保健室へ向かった。

★　★　★

「晶(あきら)へーきかなぁ」

桜(さくら)が晶(あきら)を保健室へ連れて行ってしまったせいで俺一人。

下駄箱を通った瞬間、花実(はなみ)が桜(さくら)の靴を持っているのを見た。

「おいッ！何してんだ！！」

俺は花実(はなみ)を呼び叫ぶ。

「中村(なかむら)君！・・・あれ？桜(さくら)ちゃんいないんだ」

「あー」

その言葉を聞いた花実(はなみ)はふ～んという顔をした。

「何でいやがらせすんだ！！」

「ねー。中村(なかむら)君」

「あ〃ん？」

花実(はなみ)は俺に近づいて来る。

「桜(さくら)ちゃんにいやがらせしてほしくなかったらデートしてよ」

「は？」

なんでそーなるんだよ？

関係ねーだろ。

しかもお前が俺に勝てるわけねーだろ。

「今度のいやがらせね。豚君と像太君に襲ってもらおうと思ってるんだ。これじゃぁさすがの中村(なかむら)君もおてあげでしょ？」

「・・・ッ」

くそっ！

学校1デブ二人組の力じゃ俺も無理だ。

でも・・・桜(さくら)にかわいそうな思いさせたくない・・・。

「・・・分かった」

★　★　★

「あ～！！晶(あきら)のこと構ってたら遅くなっちゃったよぉ！」

私は晶(あきら)を保健室へ連れて行っていたのだ。

秀斗(しゅうと)との約束があったので一目散に教室に戻る。

ガラッ

教室のドアを勢いよく開ける。

「秀斗(しゅうと)！！遅れてごめん」

教室内はガラッとしていて誰もいない。

・・・どうして？

約束したじゃん。

やぶったの・・・？？

ひどいよ・・・。

私はドアの所で立ち尽くす。

「花本(はなもと)？」

背後から私の名前を呼ぶ声が聞こえる。

振り向いてみると、そこには担任の先生がいた。

「先生・・・」

「どうしたんだ？」

「あ。あの！中村君しりませんか？」

「え？中村ならさっき帰ったぞ？」

「・・・え？」

なんで？

どうして帰っちゃったの？？

ひどいじゃん・・・。

もう自分勝手はしないって誓ってくれたのに・・・。

私は1人で帰ることになった。

トボトボと道路を歩く。

家に帰るには海を通らなければならない。

私はボーッと海を眺めていると、砂浜に梨砂ちゃんと秀斗らしき人が立っていた。

・・・なんで？！

私じゃなくて梨砂(りさ)ちゃんといるの？

「秀斗(しゅうと)！！」

私はズカズカと砂浜を歩く。

「なんで梨砂(りさ)ちゃんといるの？」

「・・・」

秀斗(しゅうと)は下を見ながら黙りこんでいる。

《ちがうんだ》って言ってよ。

「私たちデートしてるんだから邪魔しないでよ」

私たちの会話に口を出す梨砂(りさ)ちゃん。

「え・・・？デート？」

デートって・・・どうゆうこと??

「ねー?中村君♪」

秀斗に問いかける梨砂ちゃん。

《嘘だ》って言って!

「・・・ああ」

小さくつぶやいた秀斗の口。

そんな・・・。

私より梨砂ちゃんを選んだってこと?

自分から私に告白したくせに・・・。

私は涙と共に怒りも込み上げてきた。

私は首にかけていた秀斗からもらったペンダントを取った。

「秀斗のバカ！大っ嫌い！！！！」

ペンダントを勢いよく砂浜に投げつけた。

「桜」

「秀斗・・・。今度は秀斗が私のこと嫌っちゃったんだね・・・。さようなら」

私は涙を流しながら走った。

「桜！！！！！！」

秀斗の声は私の耳に届かなかった。

道路に出た瞬間・・・。

キキーッ

車にひかれてしまった。

★　★　★

「さ・・・桜(さくら)!!」

俺は急いで桜(さくら)の元へ走った。

見るとそこには血だらけの桜(さくら)が道路に倒れていた。

俺の瞳から涙が込み上げてくる。

「桜(さくら)ー!!!!!!!!!」

俺は桜(さくら)に抱きついた。

★　★　★

♪~ピーポーピーポー

・・・何の音？

これは救急車？

そっか・・・私車にひかれちゃったんだっけ・・・・。

でも・・・なんであんなところにいたんだろ・・・・？

・・・体が動かない。

目も開かない・・・・。

私・・・このまま死んじゃうのかな・・・・。

あの人と結婚したかったな・・・・。

・・・あの人？

あの人って・・・・誰だっけ？

「んっ・・・・」

私は目を覚ました。

ここは・・・どこ？

見る限りここは病室にいるようだ。

私・・・車にひかれちゃったんだっけ・・・。

ズキッ

頭が痛む。

「起きたのか？」

私に問いかける男性。

・・・誰？

私に近づいて来る。

「軽い怪我でよかったな」

にこっと笑う男性。

この笑顔・・・前にも見たような気がする・・・。

でも・・・思い出せない。

「あの・・・。あなた誰ですか？」

「え？」

★　★　★

「記憶喪失ですね」

「記憶・・・喪失・・・」

俺は先生に問いかける。

「物や場所などは覚えているようですが、人の名前や人間関係を忘

れているようです」

医者にきっぱりと言われ下を向く俺。

・・・なんで俺を忘れるんだよ。

もっと笑い合いたかったのに・・・。

俺は病室に戻る。

「本当に分かんねーのか？」

「あのですね！見知らぬ人にきやすく話しかけるなんて何様のつもりですか？！」

見知らぬ人・・・か。

ほんとに覚えてねーんだな・・・。

「お前の名前は？」

「花本桜（はなもとさくら）」

・・・え？！

なんで自分の名前分かるんだ？

まさか・・・記憶戻ったのか？！

「じゃぁ俺は？」

「・・・誰ですか？」

なんで俺のこと忘れて自分のことは覚えてんだよぉ・・・。

深いため息をする俺。

「ＮＯ．１の女子は？」

「梨（り）・・・。分かんない・・・」

花実（はなみ）のことも・・・。

どうゆうことだ？

しゃーねぇ。

これから教えていくか。

「俺は中村秀斗(なかむらしゅうと)」

「秀(しゅう)・・・斗(と)？」

「ああ」

「痛っ！」

桜(さくら)は頭をおさえこむ。

「どうした？！」

俺は桜(さくら)のもとへ駆け寄る。

「・・・なんか、あなたのこと考えたら頭が・・・」

・・・なんか、俺のこと受け付けねーって感じだな。

もしかして俺のこと・・・。

★　★　★

その後私は退院。

普通に学校にも通うことが出来る。

「桜(さくら)！」

「晶(あきら)・・・。どうしたの？」

晶(あきら)が心配そうな顔して駆け寄る。

「どーしたじゃねーよ。交通事故にあったって聞いたから・・・。大丈夫なのか？」

「あー。うん。もう平気」

「よかったぁ」

ホッとしている様子の晶(あきら)。

心配してくれてたんだ・・・。

ありがと★

「んで、秀斗(しゅうと)とはどーなの？」

「へ？」

秀斗(しゅうと)君がどうかしたの？

「うまくいってるのかってこと！」

うまくいってる・・・？

「ど・・・どうゆう意味？」

「は～？あんたどうしちゃったわけ？進展あったの？」

「なにも」

「は～～～？付き合って何か月経ってのよ」

・・・え？

「つ、つ、つ、付き合ってる？！」

私は思わず叫ぶ。

「え？何言ってんの桜（さくら）」

晶の頭上にははてなマークが浮かんでいる。

「わ・・・私！秀斗（しゅうと）君とは病院で会ったばかりで付き合ってなんかないよ？！」

「え？！」

晶（あきら）はなぜか走り出し、どこかへ行ってしまった。

★　★　★

「秀斗！」

秀斗はうちの声を聞いたのか振り向いた。

「ん？晶どした？」

「どしたじゃねーよ！」

うちは叫ぶ。

「桜。お前と付き合ってねーって言ってんだぞ・・・？」

うちは息をきらしながら秀斗に問いかける。

「あいつ・・・忘れてんだよ・・・俺のこと」

「え？！」

秀斗は全部話してくれた。

「マジかよ・・・」

「ああ。なぜか俺と花実のことだけ忘れてやがんだ」

・・・そんな。

なんで秀斗(しゅうと)のこと忘れちまうんだよ・・・。

あんなに好きだったじゃねーか。

★

★

★

「もー。晶(あきら)どこ行ったの？」

私はどこかへ走って行ってしまった晶(あきら)を探し回っている。

「桜(さくら)ちゃん？」

私は名前を呼ばれたので振り向く。

すると私を呼んだのはかわいい子だった。

「もう大丈夫なの？」

「え？えぇ・・・」

・・・誰？

なんで私のこと知ってるの？

「あのぉ？あなた・・・誰ですか？」

「え？何言ってるの？！梨砂(りさ)よ。冗談はやめてよ」

「梨砂(りさ)ちゃんかぁ・・・。良い名前ですね」

「あなた・・・。どうしちゃったっていうの・・・？」

・・・え？

どっか・・・おかしいのかな？

「普通・・・ですけど？」

「もう！！からかうのもいーかげんにしてよッ！」

梨砂(りさ)ちゃんは叫ぶ。

それと同時に私は梨砂(りさ)ちゃんに肩をドンッと押された。
その衝撃で尻もちをついた。

「いた・・・」

「どうした?!」

梨砂(りさ)ちゃんの声を聞いたのか、秀斗(しゅうと)君が走ってきた。

「秀斗(しゅうと)君・・・」

「桜(さくら)ちゃんが冗談ばっかり言うから・・・」

下を向く梨砂(りさ)ちゃん。
秀斗(しゅうと)君はその言葉を聞き、しゃがみ込む。

★　★　★

「何言われたんだ？」

「あなた誰ですか？って・・・」

その言葉を聞いた俺は、立ち上がる。

「花実（はなみ）。ちょっと来い」

「うん・・・」

俺は隅っこに花実（はなみ）を呼んだ。

「桜（さくら）な・・・。俺達のこと忘れてんだよ・・・」

「え？！」

「だから冗談じゃないんだ」

「そっか・・・」

★　★　★

「桜ちゃん・・・。ごめん」

梨砂ちゃんは私に謝った。

「いいよ」

私はニコッと笑い、許した。

帰り、私は秀斗君と並んで帰った。

「なー。俺のこと・・・」

「思い出さないよ」

ガクッと肩を落とす秀斗君。

私は思わず笑ってしまう。

「そうだ！桜（さくら）わりい先帰っててて！！」

「え？あ・・・うん」

そう言って秀斗（しゅうと）君は手を振りながら砂浜へと走って行ってしまった。

★　★　★

「たしかこの辺に・・・」

俺は砂浜である物を探していた。

・・・ペンダントだ。

それを見せれば思い出すかもしれないと思ったからだ。

・・・でもどこにもない。

くそぉ・・・。

どこに投げたんだ？

「あったぁ！！」

あれから3時間後、探し回り、やっと見つけた。

「よし！これで思い出す！！」

★

★

★

「はぁ・・・」

私は家に帰り、部屋のベットに寝転んでいた。

☆コンコンッ

窓から音が聞こえた。

そこには秀斗(しゅうと)君がいた。

「な・・・なんで窓なんかに?!」

私は窓を開けた。

秀斗(しゅうと)君は軽々と部屋に入って来た。

「これ・・・」

「え？」

秀斗(しゅうと)君が差し出したのはハートのペンダントだった。

トクンッ・・・。

このペンダントどこかで・・・。

「やる。開けてみ？」

私はハートをパカッと開ける。

左には秀斗君の写真。

右には私の写真が入っていた。

いつのまに私の写真・・・。

「思い出した？」

私は首を横に振る。

でも・・・。

これやっぱりどこかで見たことがある・・・。

（これ・・・やる。え？好きですッ！私も♪）

この言葉が頭に浮かんだ。

誰との会話・・・？

「『好きですッ！』」

「え？」

・・・今のって・・・。

「『もう自分勝手なこといわねーし、サボらねえ。花本（はなもと）・・・いや。

桜(さくら)のこと大事にする。だから、もう1度付き合ってください！』」

・・・この言葉・・・・。

聞いたことある・・・・。

そうだ・・・・。

秀斗(しゅうと)と喧嘩して・・・告白してくれたんだ・・・・。

秀斗(しゅうと)・・・・？

あー・・・・。

秀斗(しゅうと)君のことか・・・・。

「バーカ。何あの時と一緒のセリフ言ってんのよ」

私はくすくすと笑いながら言った。

「え？お前・・・」

「思い出したよ？」

私は右手でピースを作る。

「マジで・・？やったぁ！」

秀斗（しゅうと）は私に抱きつこうとする。

「待って！！」

それを止める私。

「・・・で？どうして梨砂（りさ）ちゃんと砂浜にいたの？」

「あー。あれはおどされて無理やりのデートだよ。安心しな」

「えらそーに。ま、いっか。よかったよかった」

これで仲直り♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9802d/

無くしたペンダント

2011年1月3日19時46分発行